

映画や演劇、美術や音楽が溢れるこの街で  
私はもう一度誰かと出会い直す。

# のきした journal



vol.4

All human beings free from fear and want,  
and enjoy freedom of expression, speech and belief.



のきしたに関わるメンバーの声、のきしたに集まるみんなの言葉。  
世界が見過ごしてしまいそうな、この日常の景色を世の中に届けたくて。  
みんなの表現の場「のきしたジャーナル」第4号。  
今回のキーワードは「手紙」です。

2024.FEB / TAKE FREE

発行：のきした

# 時間を旅する とどかない手紙

過去や未来の誰かに向けて、架空の「手紙」を書いてみませんか？という呼びかけからスタートした「のきした journal 4 号」。今回はやどかりハウス一時休業を挟むさまざまな出来事や、犀の角で 3 年越しで作られた演劇「Before the Dawn 第二部～島崎藤村『夜明け前』を巡る旅～」にまつわるあれこれを、みんなから寄せていただいた「手紙」とともにお届けします。

嘘の中に隠した真実、物語に託した時代の憂い。時間や空間を旅してようやく、私たちの「今」がみえる気がしてきました。

Yuki,

I don't have much time to write but I will bear my stomach to you. You are not happy. I have noticed for awhile that you have been languishing here. You do what you are asked but you don't seem to reap any rewards. There is a place you can go on the other side of the world. I want you to be confident that you can do this for me. I need you to succeed because I can not be with you always.

You see, I couldn't always be there for you and you learned things that you did not need. They help you but they distract you in your moments of immaturity. You have to be more prescient of the times we are going through and make something of yourself. You see, you cannot "get by" the way you use to: everything has to make sense when you do it. Or, you will be out of place. Be conscious of the fact that I am not a cruel master but know that I am not a good friend or a teacher. I am merely a guide for you at this time. I am making sure you will be confident in your endeavors always.

I had dinner the other night with an old friend and she noticed that you are always stewing, thinking about your future as if there is something you are reaching for over the horizon. I want you to go where I am sending you and see if you like it there. If you do, I can find you something to do but you cannot mess around. You have to be focused and competent that you can complete the task. "Be ambitious!" , but don't move so fast that your common sense is behind you.

Satori

A Unsent Letter to the Past \_ Phillip Logan

ユキへ

書く時間が十分にはありませんが、腹を割って話したいと思います。あなたは幸せではありません。あなたがここでぐずぐずしているのはしばらく前から気づいていました。あなたは他人から求められたことをやっているのに、何の報いも得られてないようですね。地球の裏側にも行ける場所はありますよ。私のためにしてくれていることに対して自信を持ってほしいのです。私はいつも一緒にいることはできないから、あなたには成功してほしいのです。

わかるでしょう、私がいつもあなたのそばにいることができなかっただし、あなた自身もそれが必要じゃなくなったことを知ったから。彼らはあなたの助けになるけれど、未熟なあなたの気をそらすことになるでしょう。私たちが経験している時代を見通して、そこから何かを作り出していくなくてはいけません。わかるでしょう、これまでのやり方で「やっていく」ことはできないですから。やるからにはすべてに意味を成さなければなりません。さもないと、居場所がなくなってしまいます。私はよい友達でも先生でもありませんが、残酷な主人でもありません。そこをわかっていただきたいのです。私は今この時、単なる先導者にすぎません。私は、あなたが常に自信をもって努力できるようにしているのです。

先日、古い友人と夕食を食べたのですが、彼女は、あなたがいつも煮詰まった様子で、遠い地平線の彼方に手を伸ばすかのように自分の将来について考えているということに気づいていました。私があなたを送っていく場所について、そこが気に入る場所なのかどうか確かめてほしいのです。そうすれば、あなたが無駄に時間を過ごすことなく、やるべきことを見つけてあげます。するべきことを終えるには、集中力と能力が必要です。「野心的であれ！」と言いたいけれど、でもあなたの常識を無視するほど、焦って行動しないでくださいね。

サトリより（過去へ送る、届かない手紙 \_ フィリップ・ロゲン）

## やどかりハウス第二幕 “助かり合う私たちへ”

ロゲンは天使だったのではないか。そう思うことがある。

自由の国アメリカで「世界の悲しみ」を一身に背負い、深手を負った天使は、命からがら「日本」というより僕らの元にやってきた。誰よりも礼儀正しく、優しく、澄んだ魂を持った彼は、日本語をほとんど話せなかったが、みんなの心の中にある温かなものと通じることができた。やどかりハウスに逃れてきた傷ついた女性に「ロゲンとなら一緒に住んでもいい」と思わせ、精神を病みフリーズしてしまった彼を小さな子供たちが囲み癒そうとした。「あと 200 円しかない」と犀の角に来てから 2 カ月もの間、様々な人達が公私にわたり彼が笑顔で生活できるよう手伝った。私自身も我が家に泊めさせ、温泉に連れてていき、洗い場でフリーズしてしまう彼の入浴介助のようなことまでした。いつの間にか私たちの生活はロゲン一色になっていた。しかしそのことが嫌ではなかった。むしろ幸せに感じることさえあった。あれは何だったのだろうか。

滞在期限が迫る中「観光ビザで入国したが困窮しファミリーからの支援も受けられず孤立した外国人」に、私達がしてあげられることには限界もあった。あらゆる公的機関や民間支援や専門家を頼ったが、手立てではなく二ヶ月が過ぎた。私たちは結局警察を経由して行政に彼を預けた。行政側も制度がない中で超法規的に動いてくれ、彼は一旦精神病院に入院し、国に帰国することとなった。後半の期間、彼はいつも見えない敵に追われており、銃に見立てたハンガーで私達に銃口を向けさえした。「うまくいかないことは最初から分かっていた」とも話した。あんなに嫌がっていた国へと帰国した彼とは、その後まったく連絡が取れず、消息は分からなくなってしまった。

そして、やどかりハウスの流れはそれ以降大きく変わってしまった。ロゲンがいた 2 カ月間に生まれた一つの空間、そのブラックホールのような次元の穴には、彼と同じようなどうしようもない問題を背負った人たちが、まるで吸い寄せられるように押し寄せた。不思議なことに皆やどかりハウスを知って辿り着いたわけではなかった。私達は身も心も翻弄されながら、その真っ暗闇の前に立ち尽くした。もはや吸い込まれそうなギリギリのところで無期限休止を決

断した。それから毎日のように私達は話をした。多いときは一日中議論をした。とても苦しい時間でもあった。嵐の大海上で船同士をしっかりと舫わないと沈没しかねない状況だったように思う。話すことによって自分達を舫いながら 2 週間が経ち、ようやくたどり着くべき岸が曠げに見えてきた。私たちはいつでも暗闇のそばにいたのだということ、この狂った世界の荒波の中で私たちがやるべきことは「誰もが助かる大きな船を作る」のでは無く、私たちも共に世界を航海する小さな船同士、舫いながら共に航海するのだと。やどかりハウスは助ける場では無い。助かり合う場なのだ。どんな人も受け入れてきたからこそ見えてきた壁であり答えであった。コロナ禍に劇場で始まった物語は一幕目を閉じ、第二幕が始まろうとしていた。演題は「助かり合う私達へ」

第二幕を始める前夜。宣言文を深夜に仲間と作った。その夜にやつと言葉になったこともあった。最後のピースが埋まったような気持ちで安堵し、私は LINE を閉じた。その 5 分後である。2 カ月音信不通だったロゲンからメッセージが仲間のもとに届いた。ロゲンがいなくなり明日でぴったり 2 カ月のタイミングで。それは第二幕の幕開けになんともふさわしいファンファーレだった。私たちはもうロゲンを助けようとは思わなくなっていた。ホームレスシェルターにいるという彼と、ビデオ通話をし、満面の笑顔で笑い合い、労い合い、出会い直すことができたのだった。

第二幕が始まって最初ののきした journal。遠い国にいるロゲンにも手紙を寄稿してもらった。彼が何を意図してこの手紙を書いたのかはよく分からない。架空の手紙を書いたとだけ彼は言った。しかし意味の世界はもはや僕らをつなぐ線ではない。意味は無くとも彼の世界と私たちの世界は何一つ離れていない。いつも一緒にこの荒れた大海原を進む大切な仲間である。ロゲン、やどかりハウスに来てくれてありがとう。これまでやどかりハウスに繋がってくれた 250 名以上の人達、全ての人に感謝をしたい。ありがとう。  
やどかりハウス第二幕。舟は今、港を出たところである。

## 元島生

歌舞社会活動家。NPO 法人場作りネットを設立。年間約 10000 件の相談対応の中で見えてくる事を社会変革の場に変換する仕事をしている。1 泊 500 円で泊まれる宿“やどかりハウス”や、助かる文化を作る“のきした”など市民の助け合う力を高め合う場をコーディネートしたりされたりしている。

Dear Mr.Glenn Gould

苦しみの多いこの1年、あなたの音楽に出会えたことは数少ない希望のひとつです  
とりわけブームとR.シュトラウスのソナタは、何度聴いたかわかりません

カナダが制作したあなたのドキュメンタリー映画を観ました

そこに、頭から離れない写真があります\_\_\_\_\_親友の結婚式で、前方の笑顔の集団から離れ、ひとり建物の陰に立っているあなたの姿\_\_\_\_\_それをみたとき、私は安堵しました ああこれは、社会の中の自分だと

あなたの好きな『草枕』の冒頭は、こうでしたね

『智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。・・どこへ越しても住みにくく悟ったとき、詩が生まれて、画ができる。人の世をつくったものは神でもなければ鬼でもない。・・ただの人がつくった人の世が住みにくからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国に行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう。』

頭がよくないので、全てはまだ読めていませんが、この冒頭にはいささかの親密感を感じます

私には特筆すべき才能は、なにもありません

ただただ生きにくさと、孤独と、この世界への嫌悪感（世界がうわついて、下品で、くだらないことばかりのように思えてなりません）を抱えて生きています

しかしあなたの音楽に心を救すことや、漱石の文章に落ち着きを感じるというのは、身体のどこかは生きたがっているということなのでしょうか  
あなたはあまり信じていないようでしたが、確実にあなたの音楽は、多くの人から愛され、そしてあなたも愛されています

なにもないわたしは、死ぬ前に、誰かを、何かを、落ち着いた気持ちで愛し、信じてみたいのです 傷つくことはとてもこわいし、痛いものですが、価値のあるものは簡単には手に入らない・・つまりどこにいても、くるしみはあるのです 「ほんとう」をみようとするならば

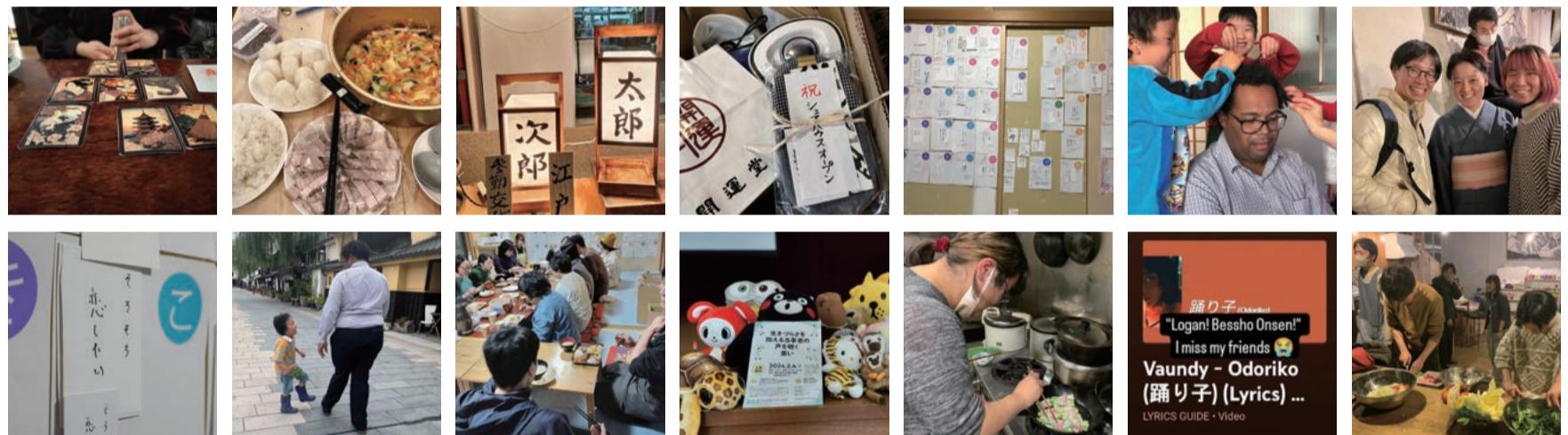
次 あなたにどこかで会う前に、トロントの自宅に寄ってから向かいますね

それまではとりあえず、この世界でレコードを聴くことにします

いつかお会いしましょう 必ず



Warm Regards  
ゆきのともしひ



## 泉は、涸らさない

持って生まれた孤独のほかに、強いられる孤独があるとしたら、それを抱えて彼女たちは逃げてくる

2023年末から2024年の1月末まで、わたしたちはこれまでになく藻掻き苦しみ、孤独だった

やどかりに駆け込む人たちが、抱えてきたものを降ろすのに立ち会うとき、わたしたちはそれを負わないからだをもたない 隣にいれば自然と交換し合ってしまうからだ 強いられた孤独の闇は一人や二人で太刀打ちできるものでは決してない

第二幕が開いた今、あの時苦しんでいたのが何故だったのか、わたしたちには迷路を上から見ているかのように見える そっちに行けば穴に落ち壁にぶつかり独りになる そっちじゃないよと仲間の声が聴こえる

1月25日、休業が明けた翌日に催された「女性と母子の自立のためのお茶会」と名付けられた集いには、犀の角に20人以上が集まった この会は、昨夏やどかりにつながった一人の女性の声から始まった

パートナーとの支配や暴力のある関係に悩み、離れたいと思っても女性一人で仕事をし、部屋を借り、社会とつながりながら生きていくイメージが持てない 否定され、馬鹿にされている日常の中で、自尊感情も肯定感も砕けてしまっている相談窓口では身体的な暴力の痕跡がないと保護できないと言われて追い返される同じ境遇の女性で家を出た経験のある人は、どういう道を辿るのか それを知りたい、聴いてみたい その彼女の一言がお茶会につながっていく やどかりハウ

スの公式LINEでそのような声があると呼びかけたところ、自分の経験が役に立つのであれば話したいという人や、私も話を聞いてみたいという人から30人近く反応があった そして1月2月とこれまでに3回開かれ、のべ37人が参加した お茶会では、毎回深刻な話も出されるが、なぜかみな語りながら凛としてゆく 帰る頃には澄んだ空気を放ってほほえみ合う 傷ついてぼろぼろの心を抱えていても、女性たちの奥の慈しみや愛情が涸れることはない そういう力強さを胸に感じこちらもまた励まされる お茶会にかかる人たちで交流できるオープンチャットには2月現在45名が登録し、眠れない夜につぶやいたり、いたわりのメッセージを送り合ったり、やさしさが交換されている その関係性の中では、硬く閉じたからだが緩んでいくような、雁字搦めに縛ったこころが解かれていくような わたしたちはわたしたちを信じることができる予感がする

強いられた孤独の闇を目の前にして、無力の中でなお助けようとしていたからだは、闇に立つ人との連なりの中で、助かり合うからだに変わる

底の無い哀しみと傷み、苦しみと葛藤は、それそのものがわたしたちの宝だ 泉を涸らしてはいけない この泉のほとりであれば、わたしたちは生きていける

## 秋山紅葉

やどかりハウスコーディネーター 人の心の奥に潜って声のかけらを泥まみれの長靴の中に見つけたい ケアの世界を一对一の関係性から連なりながらの呼応へ 故郷は山谷と南インド いつか山岳地帯の山小屋で暮らすのを夢見ながらやどかりに駆け込む人たちの隣に居る人をやっている

## 生き残ったわたしたち

2024年2月4日

「生きづらさを抱える当事者の声を聴く集い」（以下、集い）が開かれ、人口3万人弱の東御市公民館に120人の市民が集まった。

壇上には、のきしたに纏わる面々。

基調講演は、被虐待の経験者のかりんさん。やどかりともつながりがある。後半のパネルディスカッションでは、かりんさんの語りを受けて hanpo の草深さんや東御市社協の佐藤さん、まちづくり会議の掛川さん、やどかりハウス秋山が加わり、5人で対話をした。

同じ日、犀の角では「夜明け前」の千秋楽。

文化芸術と福祉の異分野で人々が交差しながらエネルギーが渦になった2月のあの日。あの時、わたしたちが乗っていた波の跡を残したい。そんな想いで犀の角にてふりかえりをした。

集いの企画者の掛川さんは、hanpo という生きづらさを持つ若者たちのフリーペーパーを仲間と共に発刊している。彼自身、生まれつきの病気を脇に抱えて生きていたが、移植で寿命を延ばした経験がある。そんな彼は、集いのテーマについて「生きづらさがライトに語られている、本当の当事者性で地域社会をぶん殴りたかった」と企画の背景にある想いを語る。言葉のパンチは強いが、彼の話しぶりからは、生きづらさ自体をどうにかするのではなく、問い合わせて捉え、そこから何を壊し何を産み出せるのかという希求的なものを感じた。

基調講演をつとめたかりんさんは、この日のことを次のように語った。  
「人生を振り返り、何が1番苦しかったかと言うと、地域の目だった。それがどれほど暴力的か、傷ついてきたか。私がいた施設は児童心理治療施設で、線路に投げられたり、川に落とされたり、包丁で切り付けられたり、過酷な幼少期を過ごしてきた子達が山のようにいて、みんな大人に対して不信感を持っていた。そこでは毎日のように、子どもたち同士で自分が苦しかった事を話した。自分の中には、みんなを置いて生き残ってしまったという

感覚が強い。講演では、その子たちがいまだに社会に排除されて生きていることを感じてほしいと思った。」

彼女は講演冒頭「私の話に感動しないでください。答えはありません。考えてください。」と言った。その真っすぐな言葉を聴いて、参加者たちは目線を上げ彼女の声に一層耳を澄ますことになった。

当日は参加しなかったが、聴き手としてふりかえりにいてくれたサワタリホさんは「私自身も兄が父から虐待を受けて、兄の泣き声がしている時に、助けにも行かず自分の部屋でただ怯えているだけだった。だから傷ついた人がいるなかで、自分だけ助かってしまったというのものはすごく苦しいものがあるんじゃないかというのは想像できる。」とかりんさんの言葉に応答した。

この若者たちは、背景は三人三様だが、生きづらさを抱えて生きてきた経験と、今はその生きづらさを生み出す社会に生きる一人だという自覚との間で、なにができるのかと自問し続けている。

当日は、会が終了した後も、多くの人が会場に残って対話をしていた。どの人も、自分の中に投げ込まれた問いに困惑しながらも、どこか眼には光があるように見えた。その人のからだを通した言葉（経験の言葉）で生きづらさが語られるとき、誰かの心に小さな希望を灯すことがある。この日は、それが参加した多くの人に起こったのかもしれない。そう考えても不思議ではないあたたかな空気が会場を包んでいた。

掛川さんは、この日を足掛かりに、市民との対話の機会を模索している。簡単にはわかってもらいたくない自分たちの生きづらさに、それでもわかるうとすることを止めてほしくないと彼は言う。

わからないから、わかりたいと思い続ける。一緒に居ようとする。その姿勢が社会のまなざしを作る。

どういう世界なら生きていきたいと思えるか、わたしたちはいつも問われている。

2月8日 「生きづらさを抱える当事者の声を聴く集い」ふりかえり  
話し手：かりんさん、掛川偉太郎さん 聴き手：サワタリホさん 書き手：秋山紅葉（やどかりハウス）

### やどかりを利用するかどうか迷っている貴方へ

最初に言っておきます。迷ってるなら、とりあえず連絡してー！

やどかりに「行かなきゃよかった」と思うよりも、「あのとき、利用すればよかった」と思うことの方が、たぶん、辛い。

私は、やどかりに相談しようか密かに迷っている間に、子どもが家を出ていき、家族関係が崩壊したから。



子どもが春休みだったときのこと。

夫は長期出張中で、私は子どもと家で二人きり。（精神科医は「ずっと二人？そりゃー、良くないわ」と一刀両断だったが、長くなるので割愛。）いろいろあって今までにないほどのストレスで、「やどかりに行きたい」「でも、子どもを置いて一人で行けない」と悩み始めて3日後のこと。ある出来事があった翌日、子どもは自ら外部に助けを求め、そのまま家に帰らなくなりました。

出張から戻った夫と二人で、子どもが帰るようにいろんな方の手を借り…最終的に、子どもを帰すために母親の私が家を出て、現在に至ります。

正直、夫にも子どもにも言いたいことはあるし、家族が原因でずっと辛かった自分に気付いたのもあるしで、一人暮らしあけっこ快適。

でも、「こんなことになるなら、早いうちに、やどかりを利用すればよかった。」「子どもを置いて宿泊できないなら、どうすればいいか相談すべきだった」とも思っています。

再び家族と一緒に暮らすのは理想だけど、いろんな意味で、元通りにはなれないでしょう。

和解するには、数年は必要かな…あのとき、やどかりに相談していれば、数日で済んだかもしれないのにね。

さて、ここを読んでいる貴方は、「のきしたジャーナル」をどこで知りましたか？

誰とも繋がれない、知りあいには相談できない、どうしていいか分からぬ…そんな悩みを抱えていませんか？

のきしたジャーナルが貴方のアンテナに引っかかったということは、貴方が「のきした」を必要としているのだと、私は思うのです。

自分では「こんなこと」と思っている悩みでも、周囲からすれば大変なことかもしれない。

大切なのは、今、貴方が誰かの助けを必要としているということ。

だから…やどかり、犀の角、映劇、etc、頼ってみて。誰かが話を聞いてくれるだろうし、新しい出会いがあるかもしれないから。

家族関係の辛さをずっと我慢していたことで、修復できないほど悪くなってしまった私から、今、悩んでいる貴方へのお願いです。

Tomo



## 『夜明け前』を巡る旅

先日『Before the Dawn 第二部～島崎藤村『夜明け前』を巡る旅～』の上演が終わった。2021年の春から島崎藤村『夜明け前』と並走した3年間がひとまず一区切りとなった。

コロナの影響をもろに受けたこの3年は、今までの常識や社会のあり方を問い合わせ空気を運んできたと思うし、今もその問い合わせは続いている。私たち演劇をやるものにとっても、なぜ演劇なのか、なぜ劇場なのか、そもそも演劇は必要なのか、を問い合わせざるをえないときだった。

藤村プロジェクトの拠点である犀の角は、特にその問い合わせに果敢に挑んでいたと思う。

「やどかり」や「のきした」の活動は、犀の角をただ演目やイベントを観るだけの場所としての劇場ではなく、人が集まる場、何かなくてもいいい場としての劇場に変えた。はたから見ていると、それはどこかの「劇場」みたいになろうとするのではなく、犀の角に関わる人々が、自分たちなりに、自分たちの思う「劇場」をなんとか作ろうとしているようにも見えて、とても興味深かった。

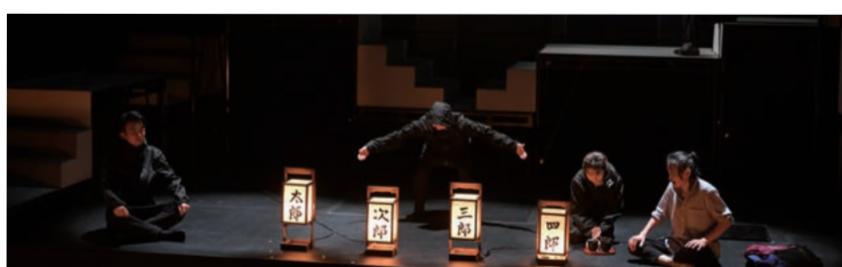
第二部を作るにあたり、いわゆる演劇作品を作ることを目標にするのではなく、私たちにとって今必要な演劇とはなにかを考えていきたい、みたいなことを話したことがあった。それは、犀の角がさまざまな活動から「劇場」を問い合わせ作業をしてきたのと同様、私やプロジェクトの人たちの「演劇」を問い合わせし、私たちなりの「演劇」を作りたいということだったのだと思う。



上演が終わって、その問い合わせに結論が出たのか、と言われると正直分からぬ。しかし、そのヒントになるものは見つかったように思う。この3年のプロジェクトの間に実に多くの人の手を借りた。出演者、スタッフはもちろんだが、1年目のリサーチで出会った人々もそうだし、2年目の朗読ツアーのときに出会った人々、一坪半劇場での『夜明け前』全編リーディングに参加してくれた人々、2部の上演の際、衣装やヘアメイク、小道具などで協力をお願いした上田の町の人々、仕込みを手伝って下さった人々、まかないを準備してくれた「やどかり」の関係者。3年でその数は数え切れないほどだ。犀の角という上田の小さな劇場が、人と人をつないでいく。そこに来る人々がそれぞれのできることを持ち寄って、大きな物語を紡いでいく。決して初めから意図していたことではないけれど、結果としてそういう風景が、創作の現場に、会場となったサントミューゼの大スタジオに立ち上がっていたと思う。それはこの3年間の犀の角や、私を含め犀の角に関わっている人々の苦闘と工夫の証であったし、今後の道標になるような風景だったと感じている。

『夜明け前』もまた、島崎藤村の問い合わせから作られた作品だと思っている。「明治維新の中で名も残さず消えて行った人々の生涯は、なにもあとに残さなかつたのか」。その問い合わせが、『夜明け前』という大作となつた。

島崎藤村のようにとはいかないけれど、これからも問い合わせを失わず、考え続けねばならない、と本番3日間に立ち上がった風景と舞台のラストで聞いた熊鈴の音を思い出している。



### 志賀亮史

演出家、百景社代表。2000年に劇団「百景社」を旗揚げ。劇団名は、古典作品や文学作品をいろいろな角度から読み直し、今にも通じる新たな景色を描きたいという思いから名付ける。2009年に利賀演劇人コンクールで優秀演劇人賞（演出）を受賞後、日本各地や時に海外での上演なども行うようになる。MPAD プログラムディレクター（2023年～）、地域創造リージョナルシアター派遣アーティスト 2024-2026



半蔵さんへの手紙を書く前に思うこと。

「生き残る」という言葉に違和感を感じてきた。この言葉の語感には、「現存する体制に順応し、あるいは寄り添っていこう」という感触がありはしないか。ここに疑惑が沸き起こる。なぜ生き「残る」必要があるのか。「生きる」と「生き残る」ことでは大分違う。何故体制に媚びなければならないのか。「生き残る」のではない、「生きる」のだ。体制側からしたら「お前ごときは眼中にない」という圧力を私は痛感してきた。何者でもない私は排除され、差別されてきた実感がある。しかしだ、肩書きなどない、何者でもない、そんな人の方が圧倒的に多いのではないか？人間ばかりでなく、多くの生きとし生けるものは、肩書きもなく、地位も名誉もなく、ただ生まれ、生きて、死んでいく。「生き残る」ための肩書きや地位は資本主義社会万歳の世においては重要かもしれない。しかし、一方で、気候変動や経済の低迷が顕著な今の世の中をみると、自分の肩書きを換金して生き延びる世界がどこまで通用するか甚だ疑わしい。圧倒的に、地位も肩書きもない人々がこの世界を地球を、宇宙を支えているのではないか？名刺に書けるような地位や肩書きなど取るに足りないものだ。その実感、あるいはリアルを共有していける場がもっと必要なのではないか。生きるとは、何だ。「生きる」とはどういうことなのだ。そのことだけを考え、実践して生きていく場を創り、守っていきたい。私は、半蔵さんの背中を追っているつもりです。間違っていたらすみません。

荒井洋文

### 3年目の自己紹介

淡々と、フラットな人だと思われることが多いのですが、実はそうでもないということを知つてもらう機会が少ないので、たまには自分のことを書いてみようかなと思います。

今回、「夜明け前第二部」では私は舞台監督という立場で関わっていました。（どんな仕事かということを説明すると棒に収まらなくなるので割愛しますね）上田に来る前は、東京でオペラやバレエなどの舞台監督助手として6年弱働いていました。そして3年前の2月上田に来て、初めて舞台監督をさせてもらったのでした。それまで、全然仕事は思うようにできるようにならないし、会社の人たちとはうまくやれないし、先輩からはいつも信頼してもらえないし、結構、散々な状態でした。

それでも私は本番を迎えると、たまらなく感動して、また次も作品に関わりたい。そう思つてしまふのでした。ああ、なんていい時間なんだろうって。ボロ雑巾みたいになつても本番中のその感動を味わいたいから、その時間を手放したくなかったから、辛いけど、しんどいけど、ここに立ち会えるならまだ頑張りたい。そうやって続けてきました。

本番中、不安と緊張でいっぱいになりながらも胸を張って、凛として舞台へ出していくキャストたちの後ろ姿の美しさ、幕が開いてしまったら止められない緊張感と結束感、よい公演を終えた時の割れんばかりの拍手、それにこの上ない笑顔を見せる彼ら。会場が一体になれる感覚。その瞬間に出会うたび、毎度毎度、胸が詰まって泣きそうになるのです。そして、私は何よりこの感動をもっともっとたくさんの人と共有したいから、続けたいのだと思います。大きな感情で胸がいっぱいになるあの瞬間に、まだ出会ったことのない人に届けたい。だって、私自身それにどれほど救われてきたか。

今回の公演で、幸いにも多くの方が、それぞれに様々な感動に出会ってくれたようでした。作品に出会う経験が、誰かの過去を癒すかもしれない。勇気づけるかもしれない。その人のこれからを照らすかもしれない。大袈裟なように聞こえるけれど、芸術は世界を救うと信じています。

真摯に、実直に、芸術の力を信じています。日本の舞台芸術を取り巻く環境には課題が山積しています。まだまだ、届けたい人たちに届けられない状況があります。私はこれからも創作現場に関わり続けようと思っています。いつか、どこかで皆さんとその時間を共有できることを願っています。

### 村上梓

神奈川県生まれ。犀の角にて舞台監督や制作として公演に関わりながら、「うえだイロイロ俱楽部」の事務局を担当。「地に足つけて、文化を生業として生きる」ことを模索中。海外研修に出ることを目論んでいる。

## 銀幕からの手紙、世界への扉

映画が誕生して129年。来年2025年には生誕130年になる。様々な栄枯盛衰をたどりながら、1世紀以上の年月を映画は生き長らえているのだ。

映画の鑑賞方法は、映画館に限らず、テレビやDVD、さらにネット配信など多岐にわたり、気軽に映画を手にとることができるようにもなった。100年以上前に作られた当時の映像を、現代に生きる私たちが変わらず鑑賞できていることが時として奇妙に感じることもある。

映画に限ったことではないのだが、芸術には時を超える力が備わっている。絵画、彫刻、音楽、文学、建築、演劇そして映画。アートや表現方法は今でも脈々と人々の営みのなかに確かに根づき、次々に新たな作品が生み出され続けている。その反面、忘れ去られていく作品や人知れず消えていく文化も山のようにある。次々に作品が生み出され、次々と作品が消えていくなかで、100年以上の時を超えて残り続けていく作品もあるのはなぜか。それはほかならぬ私たち人間が作品に込められた思いや受け取った感動が人々の心のなかに普遍的に響き続けているからだと私は思う。

過去につくられた作品をとおして、作者やその当時の人々の誰に宛てたでもない、手紙を私たちは常に受け取っている。それを享受することによって、後世に遺そうという意思がそこに存在しないとしても、自然と未来に伝わっていくものだと私は感じている。常に手紙は届けられているのだ。

映画は、時間芸術である。映画館に入って、ひとたび座席につけば、様々な国や時代を行き来できる2時間の時間旅行だ。映画から受け取る制作人たちのメッセージや思いを受け取り、映画館の外にでるときにはなにか自分のなかに変化が生まれているかもしれないし、そのときは生まれていなくても時間の経過とともに生まれてくる可能性もある。それが明日かもしれないし、5年後かもしれないし、50年後かもしれない。

人生は有限である。芸術には先人たちの有限の時間が詰まっている。先人たちが人生を注ぎ込んでくれた作品の力を借りて、無限の人生や経験を感じよう。扉を開けよ、さらば開かれん。



### 長岡俊平

1992年生まれ。愛知県出身上田市育ち。大学にて映画史を学んだ後、2017年の上田映劇再始動時より上田映劇にて勤務。中学時代の夢だった映写技師の仕事が半ば叶い、現在は上田映劇支配人として日々模索中。

## 記憶にない記録

昨年12月に「映画の学校2023」の企画でALPS PICTURESの三好大輔さんに講師に来ていただき、8mmフィルムのワークショップを行った。企画は8mmフィルムを地域から掘り起こすところから始まり、フィルム募集の情報を新聞に掲載したところ、早速実家から「うちにもあるよ」と連絡がきた。机に置かれた6本のフィルムには「恵・お宮参り」「恵・七五三」と書かれている。私の記憶にはない、自分の記録が目の前に置かれていた。

後日早速三好さんのスタジオで、自分の手で回しながら8mmを覗かせてもらう。父親が撮影した映像には、産まれたばかりの私が母親に抱かれて映っている。近づきすぎて、だいぶピンボケしますね、と笑っていたが、気づいたら涙が溢れて止まらなくなってしまった。この瞬間を残したいという父親の気持ちまでもがフィルムの映像に収められていた。たった3分の映像が、ダメダメな今の私をまるごと包んで肯定してくれた気がした。映像もまた、過去や未来を自在に行き来する媒体なのだ。あれから何度も何度も、脳内で映像を再生している。

### 直井恵

1978年生まれ。上田映劇や犀の角を行き来しながら、人との出会いにエネルギーをもうう日々。チラシ作りが息抜きになっていることに最近気づく。

MからMへ

拝啓 あなたへ

あの夜、あなたに会ってからもう一年以上が経ちました。

あのとき私は自分の声を疎んでいました。

「こんばんは」

私の第一声に、あなたは、

「ギャハハハハハ」

と、笑い出しましたね。

そのけたたましさに、被害妄想気味の私は、この特徴的な低い声を笑われたのだろうと思いました。だからあなたに低い声が嫌いかと問うたら、あなたは否定して、色気を感じると言ってくれたから。私は救われました。

あなたの言葉が私をすくいあげてくれたことは、他もあります。私は子どもという存在が苦手でした。あまりに傷つきやすく、繊細で、どんな一言が、その子の人生に影響を与えててしまうか分からぬから。そのことを打ち明けたらあなたは、でも私がお母さんだったら嬉しいけどな、と。だって優しいもん、と。そう言ってくれましたね。

私が友達と喧嘩をしたときも。口下手で接客業務がうまくできないと悩んだときも。私の子どもの頃の話をしたときも。私の子どもじみた将来の夢の話をしたときも。あなたはいつも、あなたなりの真剣さで、私の言葉に応えてくれました。

あなたは何度も否定するけれど、あなたがこの世の誰より純粋な人だと、私は知っています。あなたがしてくれるお話のすべてが、私を幸せにしてくれます。あなたが見ている世界を、私も覗いてみたい。あなたの目から見える世界がどんなものか、同じ景色を私も見てみたい。

あなたと一緒に、どんなところでも、きっと楽しい。

池島で廃墟の街を探索しましょう。スーパー・カミオカンデを見物しに行きましょう。あなたの母さんが留学したエдинバラに行きましょう。子どもの頃に見たヒグマに会いに、もう一度北海道に行きましょう。あなたの敬愛するサン・テグジュペリが見ていた景色を見に行きましょう。

あなたの見る景色の中に、私もいたい。あなたのそばで、ずっとあなたの話を聞いていたい。あなたがどんなに素敵なお人なのか、私が教えてあげたい。あなたがあなた自身を愛せるようになるその日、そばにいるのは私がいい。

生まれててくれてありがとう。あなたの誕生を、毎日お祝いしたいくらい、あなたがこの世に存在してくれていることが、嬉しいです。あなたのことを知ってから、私も私自身をもっと知れたり、好きになりました。

私を幸せにしてくれて、ありがとう。

みんなで  
つくった  
動画です！

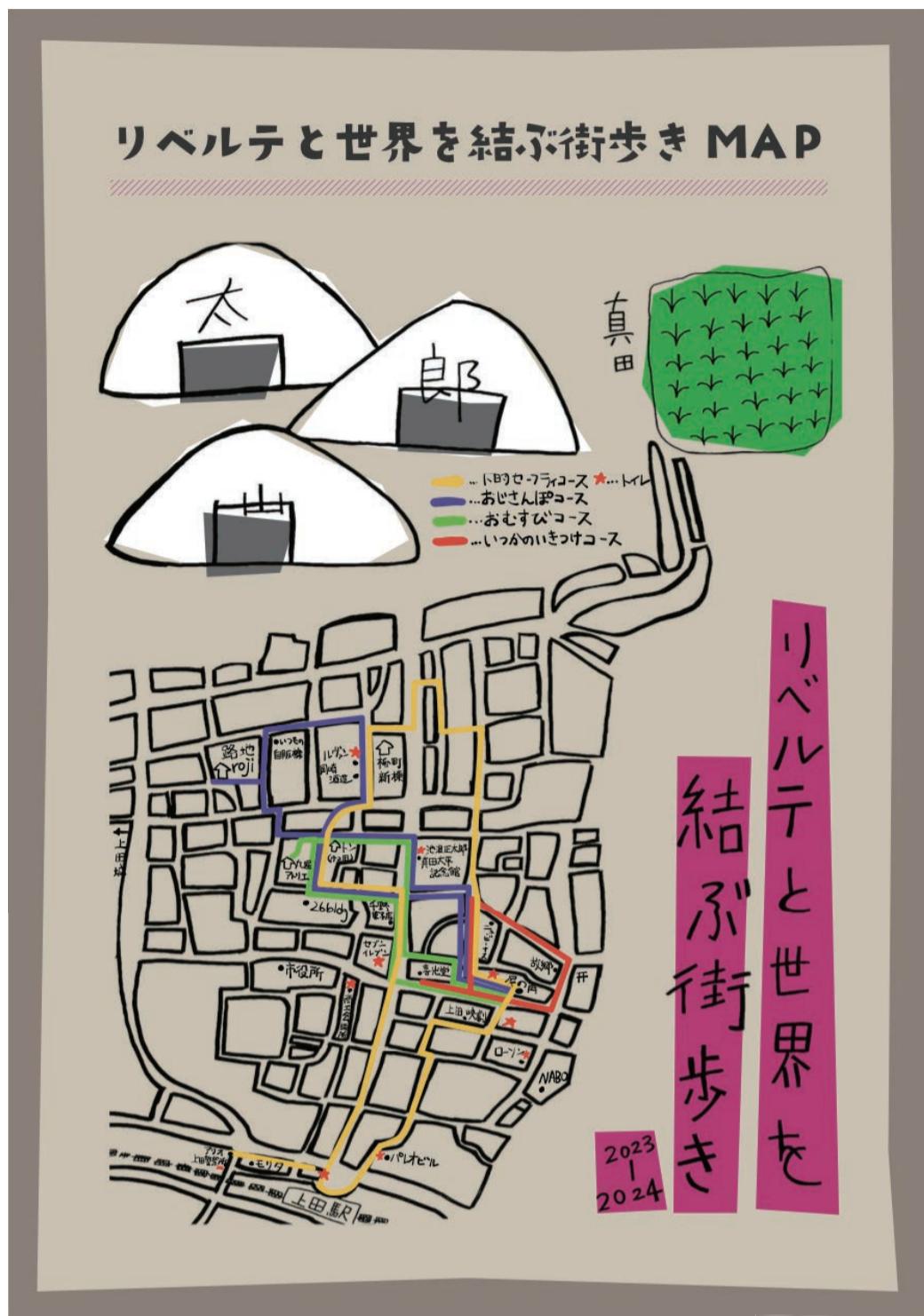


明治のことばと昭和の映像を繋ぎ合わせた「上田唱歌」

養蚕が全盛期の頃、生糸を運ぶために鉄道がひかれた時代に作られた「上田唱歌」。歌詞には、にわかに活気づき発展していく上田の街の様子が描かれています。明るい未来が開けていた感じや建物や商店街などいまも続く街並みの始まりを想像することができます。歌はイロイロ倶楽部、やどかりハウスのメンバーに歌っていただきました。こちらのQRからご覧いただけます▶



## リベルテと世界を結ぶ街歩き MAP



リベルテのメンバーが案内する、リベルテのある街の「街歩き」。このMAPは、2023年10月29日に開催した『リベルテと世界を結ぶ街歩き』(支援:信州アーツカウンシル、令和5年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業)で歩いた4つのコースを示したものです。犀の角の茶色さんと杏子さんや、荒井さんも、リベルテのメンバー やスタッフとおしゃべりしながら「リベルテのある街」の白地図に街の記憶や思い出、出来事を書き出したアーカイブから、それが触れている世界が見えてきました。そこから生まれた4つのコース、リベルテのメンバーと一緒に歩きませんか？

### 武捨和貴

1982年生まれ。長野県上田市出身。NPOの名を「リベルテ」というかり名付けてしまったばかりに、そこに集う人によって自由という矛盾を苗床にした多様なビオトープが形成され、自らも棲息する。NPO法人リベルテ代表理事。2021年から「路地の開き」という福祉施設と地域の境界線を曖昧にしていくプロジェクトを継続中。妻、子2人と猫と暮らしている。



2023年10月29日に開催した『リベルテと世界を結ぶ街歩き』と、その制作過程をまとめた記録集を制作しました。リベルテで配布中。

[企画・発行] 特定非営利活動法人リベルテ [街歩き制作] 一般社団法人シアター & アーツうえだ [美術制作] リベルテメンバー [編集] くりもときょうこ [デザイン] 小松順子 [支援] 信州アーツカウンシル 令和5年度文化芸術創造拠点形成事業

### 戦争も平和も知らない

いつもの行き付けの小さな映画館へ行っている  
音楽をやる前は映画にハマっていた。  
戦争というより大自然災害戦争になっている。  
大地震、津波、ゲリラ大雨、スーパー台風の上陸  
この日本に接近している。  
争いはすべてではないというのはそれはこの地球を守ることか？  
ただ権力争いや大型開発をしてただの平和でなくでっちあげた。  
戦争と自由と平和はずっと昔からの遠い願い、  
そのメッセージは聞きたくない。  
この地球は終わらないが、人類滅亡にするつもりか？  
ただこの世界中が穏やかで住みたいだけだった。  
自由と平和は誰もが世界中の旅の始まりだ。  
本当は戦争知らない子供達でなく、自由と平和も知らない大人達だ。  
目の前に何か見えているのか？何か見えていないか？わからない。  
私は平和の意味はみんなのよろこびの歌を語り合っている。  
戦争は争うのでなくこの地上を守り続けるべきである。  
平和も争うのでなく夢を持って旅をするのか？  
この小さな映画館でずっとメモや本を書き留めている。  
小さい映画館で自由と平和をメッセージを  
これからここは旅に出ようあのタイムマシンのように  
ここでいろいろな出会いがあった。  
今は戦争も平和も知らない誰も気付いていない。

歌詞：Johnny Ryo

### 助からないパスワード

「助からないことをカルタにしてみるのはどうかな」リベルテむしゃさんから発せられる言葉は暗号のような時がある。体験というパスワードを入れてはじめて理解の入り口が開く。のきしたMAPなるものを計画していた段階では街の「助かる場所」をMAPにしようと僕らは考えていた。しかしあまりピントが合わない。そのうちに、助かることは場所ではなく個人の経験の中にこそあるのでは？という発見もあり、個人の経験をMAP化出来ないか？と考えた。リベルテに相談を持ちかけスタッフ達と話した時に出た言葉がそれである。ついに「助からない」まで辿り着いた。まずは体験。リベルテとやどかりハウスのメンバー達が集まり一緒に「幻聴妄想カルタ」で遊んでみた。世田谷のB型作業所ハーモニーが開発したもの。ガチで挑む人、静かに取る人、寝そべる人、それぞれの距離で楽しめる。そしてカルタの前では皆平等。読み札に書かれているのは誰かの経験。それを手で取る。触れる。面白い。その後それぞれの「助からない」を紙に書いて共有してみた。別の日、それらをいろいろに分類。壁いっぱいにみんなの「助からない」が並んだ。また別日、それに絵を足したり、のきしたむすびの日に来た近所の人たちが「助からない」にアンサーを書いた。たくさんの偶然と成り行きが、誰かの内面と出会う。とても面白い時間だった。「僕は自分の家が嫌いだ」そう書いた人の言葉にえもいわれぬ連帯感を感じた。僕自身は家族が嫌いではないのに、「金ない」にも底知れぬ安心感を感じた。依然と金はないのに。僕らはいつもひとりぼっちだ。でもひとりきりではない。助からないというパスワードを開くとそこには少しだけ助かる世界があった。この街にまた仲間が出来て僕はとても嬉しい。助かるたは街のいろんなところで遊べます。ぜひ見つけてみてください。そしてあなたの「助からない」も教えて下さい。

か

金  
な  
い

ひ

病  
院  
し  
か  
ぐ  
は  
ん  
し

元島生（場作りネット）



## ひとり Immortal

皮の剥げ掛けた己の  
眼を使い、鎧背に収めて欲しいー。  
真の天使は世界の終わりに、  
盲いで現れるだろうからー。

屋根に上って、砂に触れれば  
その夜には天が聞こえる。  
寝息の様な、  
遡る“鉢”の迫力や  
熾火に差す水の様な、

私は太古に在る。  
後の世の光を仰ぎ見ている。  
安らか故に殆どは凍る、  
山守を司る明星の主。

傷を現さなかった。  
どんな人間なら得られただろう、  
理解出来ないでいる人。  
散らばる床に言葉を拾い、  
私は一生拭えない罪を負った。

どうも宵より望めないが  
永く不憫に生きていくのだ。  
冥界に引き摺り込まれぬ為に  
立眩みを妨碍し、尚も泥濘から  
生まれてくる芽が  
青である事を祈るのだ。  
箱の中で石は目醒める。  
澆刺と、私は不埒を持って墓場へ行く、  
彼らの涙と晴れの為に。  
今は殊に人間は進化の途次、  
砌や術を教える事は出来ないが

鳥に誘われた。  
私は既に差し昇ろうと止まる。  
これは歴とした諦念である。  
酷く内輪の魔の手である。  
彼らに呼ばれているー。

最も疾うの昔に消滅していくても  
何ら不思議ではなかったのだ。  
眠らせようと私を劈く  
声があった、その直線の  
不快さと言つたら、ない。

\*

遙か彼方に梟が聞こえた。  
白緑の布の靡きから  
愛しき貴姫が降りてくる。  
彼女の口遊む音を象り  
朗らかに進み下る綿雪の  
風による右傾は焦らす様にも、  
その軌道は此方に向かって来る。  
戸惑った。しかし同時に  
その場で、私はこの世界を見直した。

音楽も私の速さになった。  
勿忘草色の温かい二重、  
柔らかく動く口角も相俟って  
どうしようもなく美しい。  
夜に棲む彼女の  
優しい囁きに包まれて  
向かい合うお互いの鼻先に  
淡く小さく燃ゆる。  
その一つ結びに私はそっと触れた。

君に誘われた。  
私は再び起き上ろうと試みる。  
これは歴とした戦いである。  
酷く内輪の火の手である。  
彼女に慕われているー。

やはり宵より望めないが  
永く夢見て生きて行くのだ。  
異界に幾度も飲込まれる様に  
有頂天を会得し、次は泥濘から  
生まれてくる芽が  
青でない事を祈るのだ。  
頭の中で鐘は鳴り渡る。  
澆刺と、早晚不埒を持って墓場へ行く、  
彼女の涙と晴れの為に。  
今は殊に我々は進化の途次、  
砌や術を教える事は出来ないが

頗りに漕いで船の迷える、  
歪みの奥に隠れる真実は  
他愛もない抱擁で露わになる。  
私も当然滅亡するだろう、  
しかし、彼らが滅亡しない生物を見つけた時  
そこに座るのは、やはり私なのだろう。  
今度は何も持たぬ者から飲込まれて  
再び来る、あの隙間に二人はいる。

屋根に座って、砂に触れれば  
その夜には天が聞こえる。  
揺動の様な、  
遡る“時”的迫力や  
繩索の颶と戻る様な、

私は左方に在る。  
壁を置く広大な野原に住む。  
夜空を睨む楽しさよ。  
彼らはこれから私のことを讃える。  
極まって暗然たる此処こそが  
正に世の中心である。



## 学校行きづらい日は映画館へ行こう！

## うえだ子どもシネマクラブ



学校に行きにくい・行くのをやめてしまったこどもたちのもうひとつの居場所として映画館を活用する取り組みです。学校でもお家でも塾でもない、「映画館」という場所で、映画を観ながら語り合える機会を作っています。

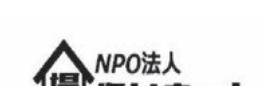
お気軽にご登録ください！



↑登録フォーム ↑上映作品など

## のきした journal

発行：のきした（NPO 法人場作りネット） 編集・デザイン：直井恵  
発行部数：4000部 発行日：2024.2.29  
助成：本事業は、（一財）中部圏地域創造ファンドの  
「新型コロナウイルス対応緊急支援事業 2021」として  
休眠預金を活用した助成を受けて実施しています。



## 緊急！ご寄付のお願い



上田の街で駆け込み宿（やどかりハウス）をはじめて3年間で約1500泊の宿泊があり250名の人が利用しました。まだ利用していないけれどその存在に救われるという声も聞かれます。困ったら泊まれてご飯が食べられて話ができる場所。その場の存在に私たち自身も救われてきました。しかし今、やどかりハウスは存続の危機にあります。

コロナ対策の補助金が終わるからです。しかしなんとかこの場を残したいと思っています。

そこでみんなでお金を集めるプロジェクトをはじめます。1泊でも2泊でも誰かが困った時に駆け込める場を続けていきたいと思っています。プロジェクトに参加してくれる方、支援してくれる個人や企業の方、またそういう方を知っている方、ぜひご連絡ください。

## 【お振り込み口座】

長野県労働金庫 普通 4051265

特定非営利活動法人場作りネット理事羽田啓

TEL : 080-4672-3757

Mail : nagano@buzzcre.net



※右のQRから寄付サイトにアクセスいただけます。

● 場作りネット <https://buzzcre.net>

長野県上田市を拠点に「場作り」を行っているNPO法人です。様々なツールで年間10,000件の生活相談を受け、そこから見えてくる社会課題を可視化すること。そして市民の力を結集して課題に取り組むことで、私たちの繋がる力を高めながら、「困り事」をきっかけにした社会作りを行うことを「場作り」と呼び、日々場作りに取り組んでいます。

● 扉の角 <http://sainotsuno.org>

劇場設備とカフェを持つシアターと簡易宿泊施設のゲストハウスからなる民間の文化施設です。街の小さな銀行だった高い天井の建物に、舞台照明のパトーンを張り巡らせた劇空間と、城下町の息遣いを感じができる小さなゲストハウス。演劇や音楽、アート作品などを鑑賞しながら、訪れた市域住民、アーティストやバックパッカーが相互に交流することができる街に開かれた非日常空間です。

● リベルテ <https://npo-liberte.org>

2013年4月に設立。日々の何気ない「自由」や「権利」を尊重していける社会や人、関係づくりを行うことを目指しています。障害福祉施設を上田市街に3箇所、アート活動を行う拠点として展開。その1つ「roji」の庭はメンバーとガーデナーがアーティストやご近所さん、学生と庭づくりのワークショップを通じて「公園」になっています。10月に「食堂」をテーマにした新しい拠点「ton-屯」をオープン。

● 上田映劇 <http://wwwUEDAEIGEKI.COM>

信州上田地域にとって歴史的および文化的な財産のひとつでもある劇場「上田映劇」を文化の拠点として活用しつつ、上田映劇の保存および、コミュニティシネマの運営全般と文化芸術を通しての教育、また映画・映像文化を中心とした地域の芸術文化活動の活性化に寄与することを目的に市民有志によって再起動した映画館です。2020年より「うえだ子どもシネマクラブ」を始動。

## 編集後記

ついにロゲンが紙面に登場しました。彼は一体なんだったのか。「ロゲン以前ロゲン以後」とか「ロゲン現象」とか、みんなが口々にロゲンとの思い出を話し、話題に事欠かなかった特異な存在。言葉にし難いあらゆる現象を巻き起こした彼の登場は、黒船来航、ベリーの登場とそう変わらない歴史的事象ではないかと思うほどでした。

ここ数ヶ月、「今」を捉えようとするたびに、過去や未来に思いを馳せる機会が増えました。島崎藤村が『夜明け前』に当時の人の叫びを託したからなのか、鉄道がひかれる前の横浜と上田の距離を感じたからなのか、時代の繁栄と終焉、社会の光と影の両面を感じながら「今」の瞬間を漂いながら噛みしめています。そんな言葉にならない感覚をみんなとも共有してみたくなって「時空を旅する」届かない、架空の手紙をいろいろな方に書いていただくことになりました。この社会に記録されること、歴史に残ることは紙一重の作業。眞実かどうかはどうでも良い。嘘と真を交えながら、言葉に託された、さまざまなおののきをいろんな時代と空間に届けていきます。

作業中、フィリピンの友人がSNSでシェアしていた民話の語り部の言葉が私が言いたいことを表してくれていたので、こちらに記しておきます。「民話(物語)は、歴史や科学や聖書と違って、眞実を主張しません。私たちの信じることに対して、あからさまな嘘をつきます。でもその嘘に込められたことに耳を傾ければ、内に秘めた眞実に辿りつけることができるのです。」今号も読んでいただきありがとうございます。(なおりめぐみ)